

情報共有の基盤

渡邊豊英

「情報化社会」という言葉が使われ出して久しいが、今や情報化社会は21世紀の社会をあらわす自然な言葉である。これに呼応するかのように「情報基盤」という用語も1990年代後半からよく用いられるようになった。情報化社会のインフラとして「情報基盤」が重要であるという認識の基に用いられている。大型計算機センターも計算能力を提供するセンターから、情報の処理・管理・通信・活用のインフラ構造を支え、学術研究におけるさまざまな情報サービスを実践するセンターへの脱皮として、情報連携基盤センターと発展的に衣替えした。特に、「連携」という言葉が「情報基盤」に挟まって用いられている。情報基盤の整備・運営に対してセンターそれ自身は当然として、関連する部局、機関と総合的に共同して対処していく機関の存在を、「情報連携基盤」の言葉はあらわしたものと理解している。多様化、複合化、分極化している学内の機関の機能性を統合的、統制的、かつ計画的に方向付けていくことが今後ますます必要とされ、その先導的役割を負うことこそ、情報連携基盤センターの「設置の心」ということだろう。

21世紀は高度情報化社会の時代であり、さまざまな日常生活の仕組みが情報システムに置き換えられ、情報システムの機能と、それを活用する人、運用する人の協調的な関係の下で、情報化の恩恵がもたらされている。情報システムを実現し、活用・運用するには恒常的に人力と資金が必要である。既存の仕組みを新しい情報システムの下に再構築し、さらに体系事態も変更しなければ利便的で、経済的な効果を得られない。

人の知的活動は知識の創造を目指して、情報の共有の下に営まれてきた。15世紀にグーテンベルクが印刷機を発明することによって、「情報の共有」に対する営みは大きく変化した。伝承、転記、模写という手段で、個々に情報を保持してきた状況から、多くの人在同一情報を同時に入手し、共有できるようにした。また、20世紀の複写機の発明は誰でもが情報を自分で複写することを可能とし、情報の共有がより一層身近なこととなった。一方、コンピュータの出現は複写の概念を一変させた。印刷機、複写機が原型情報の再生を目的としていたが、コンピュータの複写は「複製」であった。情報の編集・更新を可能とし、情報の単なる共有から創成（交信）という活動を支援した。要するに、アナログ世界からデジタル世界への発展であり、情報の共有に大きな変革をもたらしたことになる。

さらに、情報ネットワークの発達には情報の創成を加速化させ、交信の同時性を実現した。人の知的活動が複写技術の発展によって支援され、複写技術の発展は確実に人の知的活動の形態、様相までも変えた。それは一つの情報を共有するという静的（受身的）な側面のみならず、情報を

創成するという動的（能動的）な側面を提供してきた。このような起動性を向上させると同時に、別の問題を発生させた。著作権問題，個人情報の保護問題，情報の漏洩問題，セキュリティの保護・対策問題，情報の改竄問題，コンピュータ・ウィルス問題など，社会的問題が加速的に増えつつある。情報システムや通信ネットワークの発達は不特定多数の人が同時に情報を共有し，また情報を交換できる状況を構築した。個人がじっくりと相互に，また段階的に合意し，理解して活動するオフラインの時代から情報ネットワークを介したオンライン的な活動の時代へと，社会のインフラ構築が変化したためである。もちろん，そのための情報基盤は誰でも，どこからでも，いつでも，そして安全で，安心して利用できる情報処理，情報管理，情報通信の環境を実現していく必要がある。

情報の基盤に対する考え方が変化しつつある。一つの尺度が恒常的にある訳でなく，時代とともに，また環境の変化・変革・進歩とともに基盤としてもつ機能や性能，そしてその役割と理念も変化していかなければならない。情報基盤に対する方策，方略を包括的に企画し，実践していくことこそ重要である。情報基盤は人の活動のために必要で，大学では大学人のための情報基盤を構築していく機関として情報連携基盤センターがある。情報連携基盤センターは阿草前センター長の基に2年前に発足し，新しい情報サービスの姿と大学内での位置付けを求めて船出した。それを機関・部局間で橋渡しする「連携」の基に大学の礎を支える基盤構築のロードマップを描き上げること，そのロードマップの基に情報連携基盤センターとしての存在観を具現化していくことが真に重要な時期にきている。

（わたなべ とよひで：名古屋大学情報連携基盤センター長
名古屋大学大学院情報科学研究科教授）